

第一 敬 神

神靈 上に在りて照覽し給ふ

心を正し身を修め篤く敬神の誠を捧げ、常に

忠孝を心に念じ、仰いで神明の加護に恥ぢざるべし。

第二 孝 道

忠孝一本は我が國道義の精粹にして、忠誠の士は又必ず純情の孝子なり。戦陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。

— 《戦陣訓》より —

隨 想

【 太 田 博 】

水温む

ゆうべからあたゝかな雨が降った。

頑かたく々な心のようにそゞり立ってゐた枯枝にも、しとしとと春の雨が霑ぬれると、心なしかほの青い希望の芽が眸まゆを睜ひらくかのようなうだ。きびしい冬のとりこから解かれて気ものびのびとする風ふうが、一見物寂ぶつじやくびたこの視界からうごいてくるのが耐たえなく樂たのしまれる。

この早春の閑かな朝を、ひとり味はつてゐると、

生きの法悦ほふえつにしみじみと搏つかまれてしまふ。

水も温み、心は限かぎりない常住の灯に照らされて、和なんだ。

ああ佳き朝の頃ほひではある。

冬から春へ

この雲は冬の或る日もこの窓に見しとおもひつ

齒はをみがきたり

暖かき灯のともらざる家もあり昏れゆく街の

さびしさひとつ

みづからを念おもふことありわが父のかなしき性さがを

承うけ継つぐらしも

如月の暖かき日につくしき女事務員入社したり

復活祭の追憶

いもうとよ

憶えてゐるかしら いつか

かーねいしよん の咲く日に

ふたゝび 逢へるとちかったことを……………

はなぞのの そとで

なげいてゐたことが いまは

うつくしい はなたばや 染卵たまごや

きんいろの じゆうじかの ように

をさなく よみがへるのだよ

天國は さみしくないかしら

しづかに 睡ねむつたおまへの みゝもとに

やさしい おもひでの めろでいを

そつと知らぬまに 咲かせて あげよう

☆

悲しみといふものは比較的なものである。靜かに眼を閉じてみよ。自分よりも、もっともつと悲惨な生の鬭争をわづかに絶望を糧としてたゝかつてゐる人々があるのだ。みづからの悲しみが如何に安易なものであるかといふことに早く気付かねばならぬ。

☆

うち靡く春來るらし山の際の遠き木末の

咲きゆく見れば (萬葉集より)

昨夜の激しい風で咲き誇つてゐた桜が散つてゐる。花に嵐といふけれど、嵐のあとの落花の風情は傷ましいやうな気がする。何かしら齡わかい有為の人が、この世を去つて行つたように……………

☆

誰の心の中にも、自分ながら持てあますやうな、遣瀨やるせない漠とした悲しみとも愁ひともつかぬ感情があるのだらうか。時として、いらだたしく、時として絶望にちかい奈落の底にゐるやうな感慨に居たゝまれぬ想ひがする。それは若い日の安價な感傷に過ぎぬのであらうか。

青年の純粹な生活意識が現実によつて傷つけられて、八方美人的な御

座なりが臆面もなく浸潤して来ると、若い夢とか若い憧憬とか言ふものが如何にも非現實的な假象であることか、一瞬現れて間もなく消える虹にも似て頼りない空想であることか、自らの體驗たいけんを通して無慘にも思ひ知る悲しみであらう。夢とは、脆く崩るゝもろくぶに早きがゆゑに、うつくしいのであるか。あこがれとは、手の届かない遠い空間に浮遊してゐるゆゑに、うつくしいのであるか。理想の實現は、夢も空想も假借することなく蹂躪する現實といふ土壤の上に成長せねばならぬのである。此処に現実と理想との劇烈な相剋がある。

満たされざる悲しみを超えて、さらにもと覚めて前進せねばならぬ。

☆

恋愛などと言ふ齒の浮くような愚考に惑はされてはいけない。

☆

女性に對しては氣紛れな愛人であるよりも、善き友人でありたい。異性同志の友情などと言ふのは成立し得ぬと或る人は言ふ。相互の正しい理解を通して、恋愛とか結婚とか決定的な問題を超え、交遊することの可能性はあり得て可なりである。そうした純粹な友情ならばたのしいものではないだらうか。

☆

私は自身に向つて言ふ。哲学書や宗教書に肩を凝らせてゐないで、たまには落語か漫画にでも打ち興じ給へと。で私は早速読みだすのだが、そうしたものには直ぐ飽きてしまふ。通俗的な娛樂は娛しめぬ性質なのだらうか。それともそれ等には、私を満たす何ものが缺如してゐるのかも知れない。私のそんな性格はときどき他の人々としなくともよい衝突をさせることがある。

☆

灰かに月の 蒼ければ

離りし夜の 幻を

胸に擁きて 哭かまほし

咎めたまひそ かりそめの

若きあやまち 省りみつ

ああ狂ほしき わが想ひ

ひとたび往きて かへらざる

せい春愁ひ 多かれば

今宵は月を 哭かしめよ

☆

多く讀むな。讀書を少なくして體驗を豊かにせよ。體驗に沈潜して、
摺むべきを摺んだら筆を呵してせいぜい表現することだ。讀むことば
かりならば少しも發展がない。

松岡外相機立川飛行場に着陸す

卯月の空の薄曇り

春雨烟る飛行場

爆音高く飮して

歡迎陣を旋りつゝ

いまこそ還る松岡機。

欧亜の旅程恙なく

千里のそとに使ひして

克く君命を完ふし

一億こぞの歡聲の

さなかに還る松岡機。

地球のうへに新らしき

秩序を築く日独伊

胸襟ひらきがつちりと

樞軸強化の重任を

果して還る松岡機

日ソ條約手土産に

榮譽輝く空の路

外交史上燦然と

凱歌を印す一ペイヂ

いまこそ還る松岡機。

四月二十三日夜

【注・昭和十六年—1941年】

かへらぬひと

二十五日靖国神社臨時大祭に際して

【注・昭和十六年四月二十五日臨時大祭】

雲雀よ 哭くな

あのひとは

征きて 還らぬ

兵よ

逢へる春をば

待ってゐた

むすめの心を

何とせう

雲雀よ 哭くな

あのひとは

皇國くにの護りまもりの

いくさ神がみ——。

こゝろ妻

鳴なくな雲雀ひばりよ

桃もも咲さく頃ころは

征いつたあなたが

想おもはれて。

強つよい気持きもちで

ゐてさへほろり

泣なける心こころを

何なんとせう。

忘わすれがたみの

坊ぼうやも三みつつ

似にてる眼めもとの

いとほしや。

やつてみせます

涙なみだをふいて

わたし
私やあなたの

つま
こころ妻。

☆

夢の中にも陰影があることを知った。今朝の醒め際の夢である。ボクはある湖の畔で寫眞を撮らうとしてゐる。カメラを向けると、陽が翳る。何度やっても、陽が翳る。何となく腹のたつ夢だった。起きてからその陰影がはつきりしてゐるのが無性に可笑しかった。それにしても、寫眞を撮らうとした相手は誰だったのかしら。

☆

多摩川の砂にたんぼゝ咲くころは

われにもおもふひとのあれかし

牧水

何となく微笑ましい歌。愛する人も愛してくれる人もない青年期に移りつゝある少年が夢みるともなく、夢みる虹のやうな幻想だ。それは明るい五月の晝の寂しさでもあり、汚れをしらぬ或る淨らかな清々しさにも似てゐる。

☆

Love is a smoke raised with the fume of sighs

Being purged, a fire sparkling in lovers' eyes

Being vex'd, a sea nourish'd with lovers' tears

【注・シエクスピアの「ロミオとジュリエット」の中のロミ

オのセリフの一部が抜き書きされている

―「恋とはため息の雲とともに立ちのぼる煙だ、清めれば、恋するものの目に燃える火となり、乱されれば、恋するものの涙が降りそそぐ大海となる。―】

☆

星

《Miss Yoshiko Nagao への返信》

あの星は

何の星

そつと呼びたい きみの名の

頭文字か ゆふぐれに

たぐひとつ にしの空。

あの星は

何の星

そつと擁きたい 面影の

まなざしか ゆふぐれに

瞬いて なみだぐむ。

☆

天上界でも一番美しい二つの星が

何か用があるので、帰ってくるまで

その間、代りに光ってあてくれと、

あの人の目に頼んだのだ――

《シエクスペア『ロミオとジュリエット』より》

海 鳴 り

海鳴りうみな とほ香く

誰かが呼ぶよ。たれ によ

うしろ見たけどみ

姿すがたはないし。

砂丘を か むかの向ふは

海うみだけ碧あをい。

濱書顔はまひらがほは

萎しほんだごろか。

海鳴りうみな とほ香く

誰かが呼ぶよ。たれ によ

☆
☆
☆
☆

祝 禱

どこに 青い花がさいてゐるのであらう

死が おとづれてきたように

あんなにも うつくしく

あんなにも かなしく

星は わたしの 眸のそこにしづんだ。

きれいな おんがくのながれに

白い にくたいを きよめ

天のしゆくふくを 待つてゐよう

鳩はとのかたちのように

ひたひにを按くだらう 天のみひかりを――。

草や 樹木や 匍ふけものたち

そのまゝのすがたで うつくしくあれ

いとなみつくる わざの

とこしへに おごそかであれ。

☆5☆17☆

海軍記念日

☆

旗艦三笠に Z 旗が

五月のかげに するすると

あがつて日本 勝ちました。

東郷司令 長官の

めいれい 一下 てきかんを

しづめて日本 勝ちました。

強い海軍 たのもしい

太平洋の あらい波

おそれず日本 まもります。

朝日新聞に投稿した。チャーターナリズムの波にのりたい心算ではないが、どこまで社会的な地位をわたしの詩が獲得するか、を試みたかったからである。 5◎18◎

【注・傍線部について】
≪不純である

社会的地位を云々してるあひだ詩はかけぬ、詩はそのようなものと抗争するのだ。≫

【注・日露戦争時の日本海海戦の勝利を記念して、五月二十七日を海軍記念日とし、休日となっていた。】

母の日

かあさまは 世界にひとり

いゝ方ね いつも笑顔で

ご苦労を お忍びなさる。

あめの日も 雪のふる夜も

かあさまの あたゝかい胸

あるだけで 花がさくよね。

百合の香も けだかくかえる

母の日は ひごろのご恩

おもひましょ 感謝をこめて。

花の日

花の日は お花をもつて

お病気で 寐てるお方の

枕もと 飾つてあげよ。

こんなにも きれいな花を

神さまは 創造なさつた

みめぐみを 想ふことですよ。

花の日は お花をもつて

病床を 花園のよに

うつくしく 明るくましょ。

虹と子つばめ

夕立やんだ

雷やんだ。

ごらん、なゝいろ
虹の橋

すいすい子つばめ
くぐってる。

渡ってみせろ

またいでみせろ

だけど、高いよ
虹の橋

まだまだ子つばめ
とべなかる。

高山彦九郎

あれは皇居か

ちらちら灯り

男なみだに
をとこ、涙に

月の暈。

京の三條

大橋たもと

奇骨、高山

彦九郎。

懼れ多さに

勿體なさに

濡れてくるくる

兩の掌が。

むせ かもがは
咽ぶ加茂川

やなき
柳も揺れる

ちゆうぎ
忠義いちづに

な
泣かされて。

《むらさき投稿五・二八》

親知らず歯

一週間程まへから歯が痛むので、食事の時ものを食べるのに妙な歯がゆさを感じてゐた。下の右の奥歯が痛むのである。鏡に映してみると、歯ぐきがやつぱり腫れてゐるのだ。暑いので逆上^{のぼせ}気味なのかしらと思つてゐると、何だか耳の方も痛いような気がする。また中耳炎など再発しては耐らないなど内心びくびくしてゐると、影山君が、「親知らず歯が生えてくるんじゃないか。」と言ふ。それでよく注意して見ると、成程、ちひさな白い歯が奥歯の次にちよつぱり頭をもたげて居る。歯が生える！歯が生える！

何といふ奇蹟であることか。何といふ不思議であることか。理屈ばかり捏ねてゐる自分が狭いちひさな人間であることを知つて、安らかな気持ち^なが久し振りで私のこゝろに訪ねた。あゝ、理論以前に、科學以前に、生命は遅ましくあるいて來たのだ。あんまり頭脳でばかり考へるようになった人間は、靜かに凝視する術^{すべ}を會得せねばならぬ。凝視は祈りである、とりルケは言った。祈りを以て求めるものに生命は把握されるのだ。わたしは痛む歯を抑へながら、ふと思つた。『親知らず歯』といふ言葉である。丁度この歯の生える年頃の若者たちのうち

には、既に慈愛の深い両親を喪ふ運命に遭ふ人も少なくないことであらう。

或ひは、両親は存命であつてもそんな歯の生えることを知らずに過ぎることであらう。どちらの意味か、それはわからない。が、『親知らず歯』といふ言葉のめでたさ、いはば日本語の韻あひびのありがたさといふものに何故か心惹かれるものがあつた。

【注・「影山君」郡山商業銀行後輩―郡商三年後輩の影山市郎氏と
思われる】

☆ ☆ ☆

詩を書くべく私は罰せられた。これは終身懲役、

うつくしい刑罰!!

自らの詩に憎悪を感じる日なり。ふたたび灰燼にしてみました衝動が苦しく胸を壓するこの頃!!

人間が生物であることの肯定。それから……………。

恋愛は生物的成長の過程である。結婚また然りとすれば斯かる段階から更に飛躍して人間的（従来漫然と信じて来た動物と異なる一種の程度高き）な段階へ如何なる魔術を使って偽瞞したのであるか。

《恋愛は一種の経済的行為である。》

偉大なる馬鹿者ノイテンホイラーは誰ぞ。見えるものの推移を信じ得ず、心眼の映ずるものの實相を冥想してゐるような人間が一人ぐらゐ居てもよいとおもふ。

開かぬ頁ペイチ

開かぬ頁ペイチにや 誰たれのこと

書いて残のこして 置きましよか。

昔むかしブランコ 二人ふたりの乗り

揺り揺りあそんだ 少女ひとのこと。

紅あかいリボンが ひらひらと

黒くろい断髪ぼつぷと 揺ゆれました。

何故なぜか知らない 僕ぼくの胸むね

そつと何なにかが 揺ゆれました。

開ひらかぬ頁ペイチにや 想おもひ出でを

書かいたら消けして 置おくものさ。

壯丁検査受検の感想

あめつちの神をいのりて幸矢ぬき

筑紫の島をさして行く我は。

《 萬葉集 》

これは徴兵署に掲げてあつた和歌である。天地の神に祈つて自分は幸運の矢を抜き、今こそ大君の御為に筑紫の島をさしてゆくことができる。その感激がまことに高らかな聲調で詠れてゐる。

これを靜かに讀んだ時、脈々と高鳴る血潮の激しさを自分は感ぜざるを得なかつた。悠久三千年の間、皇恩に育まれてきた父祖の聲が、この時内なる盡忠のこゝろを呼び醒すのであつたかも知れない。

如何に市井の無頼の徒も、日本人である自覺のとき、肅然と尊いみづからの存在を意識するであらう。

凡そ王土に孕まれて忠をいたし命を捨つるは

人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。

佳き哉この言や。今日あるを沈思するに、偏へに 日本に生を享けた故であり、申すまでもなく、廣大なる皇恩と、併せ申すことは懼れ多いことではあるが父母の慈愛によるのである。

邦家多事の秋、召しだされて皇軍の一員となり、専心御奉公できる

といふことは、たゞに自分一個人の光榮であるのみか一門一族の名譽
でなければならぬ。現役編入があるひは召集令かは知らない。併し
日夜陛下の 兵である重任を自覺し、更に修養に努めて、いやしくも
入營の際不覺をとる如きことがあつてはならぬとおもふ。

噴きあぐる胸の火あつし神代より遠祖先とおつみおやの護り継げる火。

墓碑銘

うづめよ落葉おちば 若き日わかひの

愛知あいしりそめし 人ひとの名なを。

つもれよ粉雪こゆき わが頬ほの

熱あつきなみだの 凍こほるまで。

かくては春はるも めぐるころ

名ななき雑草あれぐさ 生おひいでむ。

ひらけよ小ちさき 花はなをもて

未完みくわんの詩句しを 刻きざましめ。

「歌女おぼえ書」を観る

信州にあった實話だそう。事實は小説よりも奇なりと言ふから、別にハッピー・エンドになったからと怪しむ必要はないが、映画としては甘すぎるとおもはれる。藝術座の水谷八重子は流石に老巧な演技でたのしい。聲が耐らなく佳い。そんぢよそこらの馳け出しの女優の追隨を許さぬものだ。上原謙は引づられる形だ。何かしら壓倒されてゐる。水谷との取組では無理なのか。劇なら兎も角、映画の中でスターの方が劇の俳優にあほられる圖は如何なる譯か。ストーリーでは庄太郎と許嫁あい子との間、歌女と縫子との間、甚だよい加減な描寫だ。もつと愛憎の激しい相剋が当然あるべきではないか。

印象的なシーンが無かつたことは遺憾である。松竹らしき凡作。

六月十八日

誤解が悲劇を生む。理解すれば悲劇はない。ロメオとジュリエットの悲劇は頑冥な双方の親達が作った。理解し合つたら、幸福の星はふたりの上に微笑んだだらう。更に深く考へると、理解のチャンスがあたりへられないと言ふことが、また一素因でもある。努めて理解する。物事を素直に見る術を学びたい。

☆

きみが孤独を愛するのではない。孤独が君を愛するのだ。

《岡としを氏》

蝻 かま
螂 きり

斧 おのふれ

斧 おのふれ かまきり よ。

斧 おのふれ

斧 おのふれ かまきり よ。

夏 なつの眞 まひるま

眩 くらめく陽 ひ。

まどろむ胡蝶 こてう

睡 ねむる蝉 せみ。

花 はなに憩 やすらひ

蜜 みつを恋 こふ。

虚 むなしき夢 ゆめを

毀 こぼつまで。

《こんなになんてを言ってしまったていゝか。言外の詩を喪つてはもはや小曲ではない。》

忙日抄

庭先を猫が走りて踏み去りしどくだみの葉の揺れの憂^{かな}しも

癩患者玄関に來^くと鍵かけて若きをとこ等薙めきあへり

《市役所所見》

癒えがたき病ひのひとの黒眼鏡^{くろめがね}うつむき勝ちの肩のわびしさ

七八日見しこともなし蒼空を珍らしきもののごとく仰ぎぬ

花をもて飾れよといふ少女ありコスモスに似し花を置いてゆく

☆

あたへられた生活の中から喜びを発見できぬ人に、どんな生活をあ
たへたつて、決して倅せになれないものです。静かに私たちの住む世
界をもっともつと住みよくしてゆかうではありませんか。

☆

實在は山彦のやうに答へない。

市金庫ブルース

おろかしきわが歌草の断片をヤクシヨの少女等、興

がりて寫し唄へる戯作いつ篇

暗い市金庫 窓の下

國税縣税 また市税

僕は押してる 赤い印

年がら年ぢゆう 籠の鳥。

窓に小鳥が 来るように

ちよつと可愛い 優ひとみ

税を納めに くる時は

何故か揺れます このころ。

雲がゆくゆく 窓の外

杳いあこがれ 白い夢

何日になったら 鳥のように

翔んでゆけましょ 蒼空を。

☆7☆11☆

できることから、できるだけのことをする。それが教養を身につける手近な方法である。できぬことを、無理にやるなかれ。それは失望と疲労をまねく。環境に即した手軽な入門は、やがて未知の楽しい世界にみちびく。

☆

勉強の眞の快樂を味わったことがあるだろうか。常に苦痛を伴はずにゐなかつた私の勉強は、明らかに手段を誤つたと言へる。もっと有機的に、頁を急がずに、落ちついて味はふべきであつた。

☆

詩はパンより無用である。しかし、生命よりは有用である。

☆

青年らしく、青年らしく、青年らしくあれ。

☆

詩の俗化は詩人に對する最大の迫害である。詩人は流行と戦はねばならぬ。

☆

純粹感情の境に立って實在を創造するは天才の仕事であると言へば、藝術は一般の知的事業とは異なつて貴族的な活動であると言へよう。慥かに藝術は精神的貴族のものであり天才の作である。

《哲学以前 209》

恋人たちにとって 數時間は 數瞬間のように想はれた。

彼は 淨らかで そして 倅せだった。

こよなく甘美な唇から 滾れる言葉のかずかずは 彼の上に乾草ほしくさにやどる露のように 降りそゞいだ。心中の善き想ひは すべて 囁やくように想はれた。「われらの此処に居るは善きこと」である、と。

別離わかれには ブルーミンの手は 彼の手に 握られてゐた。

彼等のうへに 愛にみちた星がひかり、

馥郁と薫る薄暮、

彼は再會を約した それは拒まれることがなかった。

《……カーライルの「衣裳哲学」より

試譯を為す……》

一粒りつぶの眞砂まさごに一世界せかいを視み

野のの花はなに天國あまつくにを視みよ

汝なが掌てのひらに無限むげんを

ひとゝきに永劫えいじゆうをとらへよ。

《William Blake の詩——》

序
— 十四行詩 —

それ敢て秃筆を駆りし所以。呵々。》

舞臺のうへに 演ずるは

花のヴェロナの 二名門

舊き遺恨に 新たな喧争

市民の流血 潔き手瀆す

かかる仇敵の 宿命の

胎より生を 享けたりし 星も凶なる 二情人

非業の破滅 死と俱に

親の不和をば 葬むりぬ

死にゆく戀の 哀しき顛末

兇等の最期に 始めて解けし

親の怒りの 推移をば

今より二時間 演ずる舞台

傾聴の勞を 忍びたまへば

足らぬを勵みて 補なひ申さん。

沙翁劇「ロメオとジュリエット」より——

《五・六行の訳出困難。原詩の香気を喪うこと太だしきものなるも、無為とするは即断に過ぐ、譯詞また一個の佳品たらずんば、あらず。

石佛や艸に孤座して夢ふかく
切支丹墓に傾むく花木椽
睡蓮や雷雨の中に花を置く

かまきり独白どくぱく

ぢりり ぢりり おてんとさま

暑ければ よいこらさ

鎌ふりあげて いねの花

はづかしがることもない 野良仕度ぢや

ひとつぶのおこめでも

このたゞならぬ 世のなかに

おいらのちからが 役にたつちゆうだ

よいこらさ

ぶかつこうな づうたいをして

よいこらさ

負けぢやあひすまぬと おてんとさま

ぢりり ぢりり あついのだが

ぞうざんとやら やって居りまする。

あざみ

あざみ あかいね

うれひの まんま

ないて はらした

まぶたの やうに

あざみ いたいよ

ちかちか してる

こひを なくした

をんなの やうに

わが鎮魂歌

朔風を、われは愛せり。

かるがゆゑ、わが墓は、樹氷の碑

雪の花粉に、彩れよ。

愚かにて、みにくきものの、のこしたる

阿呆なる歌 くちずさみ、

落葉散らせよ 逝ける日は、

さはあれど、

ああ、聴かざらむ、耳なきは

わが終わるなき 猛き聲

吹雪捲きつゝ 天翔くる。

筆ぎて喰ふ天仙果の果のほの暖さ

齒にかんじつゝ秋の日を脊に。

——によせて シエリイ

和める音の消ゆるとき

音楽は 追憶の中にぞ うち震ふ

やさしき董しぼむとき

香氣は めざまめて 感覚の中に息づく。

薔薇枯るゝとき花片は

最愛のものゝとして堆ねらる

しかして汝おもふ心、汝みまかるとき

恋は睡眠に入るならむ。

☆一八二一☆

秋 心 机 邊

そこ此処に蟲が鳴きそめた。りんりと無心な聲。秋らしい風が吹き、思はず襟をかい寄せずには居られない。学窓を出て三年目の秋をむかへる。

この落莫たる気持ちはそも何ものであらうか。人生の落凋期に似たその侘しさはそも何ものであらうか。

單なる秋らしい感傷ではない。自らを省みるときの、不安定な現在のポジションの故ではないのだらうか。少年らしい希望に燃え、その若々しい願ひのまゝに、すすくと志をのべることが出来たら、どんなに楽しく、また張り合いがあることだらう。僅かに膝を容るに足る陋屋に住もうとも、自らの生涯を賭けた生き方に生き得るなら、之に勝る悦びは無いであらう。

友らみな、みづから善しとし、正しとする道を嬉々として歩いてゆく。私は偶々羨望の念に耐え難い時が、苦痛でさへあつた。生じつかの愚かしい自分の才をたのんでどうもなりもせぬものを、涙ぐましい気持ちで抑へるのだった。自分が若しもあのやうに、自由に闊達に学問をすることできたらと泣く想ひであつた。

束縛は遂に私を阻んだ。そして社會的な誘惑は私を迷路に遣せた。

肉體的に、外的に刺激を求めた。併し、それが何にならう。心靜かに想ふ時、恒に胸疼く悔恨でしかない。全校をリードした昔の覇気が、みんな駄目になつてしまつたような気がした。

こんな時 もう一度学生々活に戻りたいと切にねがふ。少なくとも、憩ふことができる。現実との相剋を避けて。何が何であるか、既に、私は一切を信じなくなつた。

学生になりたいなど、一種の憧憬みたいなものに違ひない。今の大学など、墮落の外、何物でもなからう。だが、私にとって、何らかの救ひとならぬだらうか。

蟲が鳴いてゐる。やがて祖国の前衛として征く日も遠からずだ。未來は未知の闇に属する。兵隊は私を塩漬けにして聖めるだらう。戦ひの中に救ひはないか。私は推移の只中に坐つてゐるばかりだ。

詩なんか玩具以上のものでは——私にとつては——ない。

近頃熟々つくづく感じたことだ。男って何といふルーズな存在だらう。女って何と御節介な存在だらう。どつちもどつちだが、全くやり切れやしない。だが、此が反対だったら如何。男が容らぬ埒外のことには喙を入れているのも嫌だし、女が我不関焉と呑気に構えてゐるのも、見苦しいだらう。併し、一方がこれ、他方がこれ、と言ふ具合に正反対の性格の所有者の間なら何とか甘くまとまりがつく。片方が横車を押しても、一方が引込むから天下泰平だ。悲劇は同じ御節介同志のことである。男が之はかうだと言ふ。直ちに女は強硬に否定する。成程、物の見方には立場の相違でいろいろあるものだ。貴方の場合そう言ふが、私の考へでかう言ふのも正しいのだ。さう言つて、お互ひに理解し合はねば駄目だ。他人様なら高見の見物で愉快的狂言みたいに見えるが、○がそんな下らぬ相剋をしてゐられると、うんざりせざるを得ぬ。

今日の新聞に依ると、アメリカでは枢軸側艦船の拿捕或いは撃沈を宣言した。既に獨米間の戦端は開かれてゐるのである。未だアメリカは参戦一步手前だ等と言ふ消極的な観測は薄氷を踏むやうな樂觀説と言はねばならない。米國は日本を敵とする蒋介石重慶政府の援助者である。此の際抜本塞源的な米國打倒を行はねば支那事變の処理は百年河清を待つに似てゐる。獨米大西洋上の爆發は東亞にも波及するであらう。そうすればソ聯の攻撃のあることも覺悟せねばならぬ。今や日本は四面楚歌の中にあると言へる。來らぬを待まず、待つあるを待む。その不動の信念である。戦ひは勝つことである。敗北は亡國を意味する。過去の歴史はそれを證明してゐる。戦はんかな、而して、勝たんかな。

歌謡 來たぞ國民徵用令

來たぞ見てくれ 待ちかねた

晴れの 國民徵用令

君の御盾と 戦場で

銃をとるのぢや ないけれど

かたい覺悟は 変りやせぬ

戦地の友よ 案するな

弾丸も戦車も 飛行機も

及ばす乍ら 引きうけた

日頃鍛へた この腕に

物を言はせて 頑張るぞ

唸るモーター ちる火花

職場で死なう その意気で

赤誠こめる 槌の音

勝って勝ち抜く 底ぢから

汗と油で 造るのだ

こころ澄ませば 皇軍の

あの勝鬨が きこえくる

やるぞ負けぬぞ しつかりと

名譽の 國民徵用令

掌に握りしめ 誓つてる。

鐵 かぶと

てつかぶと

てつかぶと

かぶつて兄にいさん トーチカに

なんども日ひの丸まる たてたのに。

てつかぶと

てつかぶと

こんなにとくさん 弾丸のあと

見るとなんだか 泣けてくる。

てつかぶと

てつかぶと

事変もなかばで 戦死して

兄さんどんなに 口■■■■

RO人形にも、やつと芽をふいた、今年の詩歴は、よろこんでい

とおもふ。おもに小曲の推薦、入選が多かったのも、みづからの抒情を表現する術を会得したからであらうか。無理に詩をかこうとせず、うまれてくるのを待つべきだ。近時、あまりにも、観念の露出せる詩が多く、滋味に乏しい。そんなとき古風だけれど、すがすがしい小曲の抒情が胸から胸へとぢかに傳はるだけ、誰にも娛しめるのではないだらうか。

とまれ、もはや詩筆をなげうち、国家のために奔走する秋がきた。それ自体すでに壯麗な詩業でなければならぬ。 10、26

【注・RO人形―詩誌「蠟人形」のこと】

遺骨すらかへらざる日もありぬべしつゝしみて剪るわが髪と爪

よるこびのはたかなしみの二十年にぶく光れるこの爪に盡く

爪を剪る日頃の仕草けふまではかゝる想ひを為せしことなし

爪剪りて心澄みにけり君のため生命捨つるをなど惜しむべき

秋やよし醜草薙ぎて大君の御盾としわが出で征かむとす

おほみこと宣らせたまへり秋とよやよし醜草薙ぐとわれは征くなり

惜身命不惜身命おもふらくものゝふの道きびしかりるべし

二十年ただ一口に短かしと言うべからざりわが半生は

神神みすえの裔ぞわれとわが血潮高鳴るがゆゑ

先生せんせいをお送りする歌うた

——深き薫陶を賜へる恩師アンダスン先生に捧ぐ

六年間ねんかんも住すみなれた

郡山こほりやまからアメリカへ

叛國きこくなされる先生せんせいは

お心こころどんなにつらいでしょ。

尊たうとい救すくひのイエスキさまの

十字架じか負おつて先生せんせいは

日本にほんのお國くにへはるばると

渡わたつて福音みことば宣のべました。

桜咲さくらさく國くにうつくしい

こころをもつた日本にっぽんの

子供こどものすきな先生せんせいは

淋さびしくおもひなさるでしょ。

燕はきつと來年も

お家の軒端にかへります

丁度いまごろ先生の

元氣なお聲がききたいな。

横濱みなどを船出して

星のお國へ海の旅

信仰あつい先生を

神さまみちびきなさるでしよ。

《七月六日《日えうび》先生には当地最後の聖日なりしなるべし》

【注・昭和十六年十二月の開戦後、多くのアメリカ人が日本を離れた、郡山と須賀川を中心に布教活動が続けてきたミスアンダーソンもやむなく帰国した。】